

それは根岸湾から始まった 公害対策横浜方式と環境行動都市

20年後の社会について市民にたずねた平成17年度の市民意識調査では、8割の市民が「地球温暖化など環境問題がいつそう深刻化している」と答えている。こうした地球規模の環境問題の解決に向けて、市民一人ひとりが身近な地域から具体的な行動を起こしていこうと横浜市が目指すべき都市像として掲げるのが「環境行動都市」だ。

その中で、重要なポイントとなるのが、海、川、丘などの自然資源や、開港以来の近代建築、西洋館などからなる景観を将来にわたって継承すべき横浜固有の「環境」として明確に捉えていること。さらにそれらを維持保全するだけでなく、回復、創造していくことをつたっている点である。

ここでは、私たち、横浜市民が回復すべき横浜ならではの「環境」や「景観」とは何なのかということから考えてみよう。

「周五郎先生の仕事場は、間門園の離れでした。市電は既に廃止。根岸線がまだ磯子までしか開通していなかった頃の話です。当時の間門園の山は、すぐ下に本牧の海がせまり眺望絶景。まるで熱海の海岸のような、すばらしい景観に囲まれ、先生は仕事にいそしんでいました。しかし、この安らぎは、やがて失われる時が来ます。根岸のコンビナート建設が着工したのです。」

根岸湾の埋め立てをめぐる作家山本周五郎と飛鳥田一雄市長のあるエピソードが、「ハマッコ」というタイトルで『横浜散歩道』横浜学連絡会議・発行)に紹介されている。

当時市長になったばかりの飛鳥田が、周五郎のもとを訪ねてきて、根岸湾の埋め立て計画の着工についてわびるが、そ

の言葉に「政治」を感じ取り、しらけてしまい、ごろりと横になって、腕枕をしながら話を聞き流しているうちに、うたた寝してしまい、気づいたら市長は帰っていたというのだ。

山本周五郎への市長の言葉は「つたつた」といっ。

「この埋め立て工事については、各企業から今後絶対に公害は発生させませんとこの確約を取ってあります。従って先生のお仕事に差し障りがあるかもしませんが、ご容赦願いたい。」

居留地文化の始まりの地「根岸湾」

根岸湾の渚とそれを臨む丘崖は、横浜開港とともに、西洋風の観光・レクリエーションの場としての海岸線の持つ機能が、この列島において初めて発

見された場所である。山手の居留地に住む外国人によって、根岸に乗馬遊歩道路や競馬場が設けられ、金沢区富岡に海水浴場が開かれるなど、かつてペリー艦隊が「マントリンブロッフ」として絶賛した根岸湾を望む崖線に沿って「海」を観光・レクリエーションの場として愛でる居留地文化が展開された。

重要なのは、こうした西洋風のレクリエーションが、外国人に留まらず、明治・大正期の政治家や文人、横浜商人たちによって「根岸湾別荘文化」として発展した点である。

お雇い外国人たちの居留地文化に学び、まずこのエリアに着目したのが、伊藤博文や井上馨などの明治の元勳たちだった。たとえば、伊藤博文が金沢八景で明治憲法の草案を練り、金沢区富岡に別荘を設けた三条実美がお抱えの絵師に根岸湾の美しい崖線を、富岡海荘園巻として描かせたのは、それを象徴するエピソードである。

彼らに続いたのが、関内・関東地区で生糸貿易などで成功した横浜商人であった。たとえば1906年(明治39年)に原三溪が本牧の地に開園した「三溪園」は、希代の名園として当時の根岸湾別荘文化の面影を今に伝えている。山本周五郎が、本牧間門に「仕事場」を構えたのも根岸湾の美しい景観に根差した別荘文化が背景にあったからだと推察

される。

ところが、1959年(昭和34年)から国鉄根岸線の延伸計画の具体化にあわせて、中区間門町から磯子区杉田の地先まで、埋め立て総面積約600haに及ぶ根岸湾埋め立て計画が着工された。「2500万大横浜建設構想」として知られる「国際港都建設総合基幹計画」(1957年策定)は、根岸湾埋め立て計画の重要性について次のように述べている。

「現在の臨海工業地帯は、既に飽和に達し今後の工業用地は皆無の現状である。そこで新たな用地として、大黒町地先、鶴見川左岸および本牧町地先の埋め立てを行い、商工業港湾用地として活用する。さらに根岸湾を第二の工業港湾にするために、間門町・根岸町地先、磯子町・杉田地先の埋め立てをおこない、臨海工業地帯を造成する。これらの地域に重化学工業を誘致することによって、港湾及び工業都市として横浜市100年の基礎を築くことができる。」

それは、臨海石油コンビナートを梃子にした拠点開発方式によって、横浜だけでなく、この列島全体を、成長・拡大型社会へと誘う全国総合開発計画の始まりだった。同時にそれはまた、風光明媚・絶景の地として開港期の日本の避暑地文化をリードした臨海丘の手の景観だけではなく、本牧・根岸の渚



1957年当時の根岸湾



◀1959年、杉田海岸での落ちのりひろい



現在の根岸湾

を舞台に春は潮干狩り、夏は海水浴で賑わい、冬は海苔の養殖といった「ハマツ子」の生活文化に根ざした海の風物詩の消失も意味したのである。

根岸湾から始まった「公害対策よこはま方式」

周五郎の機嫌は損ねたかもしれないが、飛鳥田市長の言葉に嘘はなかった。当時、横浜市は磯子・根岸工業地帯に立地した工場の排煙などによる大気

汚染や健康被害に不安を抱く周辺住民とともに、徹底した公害抑制を目的として企業活動の監視・規制を行う。「私どもは横浜市の公害対策の実施に

さいして、科学性の原則を立て、かなりの予算を傾けて観測と調査と実験を試み、その結果から予測データを出し、当時、新たに造成されつつあった根岸本牧工業地域の公害除去に関して、たびたび公表し、住民に呼びかけ、逆転層の観測や排煙の高さの測定を住民参

加で実施した。一例を挙げて根岸湾埋立地の上空150mのところまで気球をあげ、はがきをつけた風船を放出して、それを拾った方に拾った状況を書き込んで返信していたこともある」(『都市自治の構図』飛鳥田一雄・著)

そして横浜市では、国の公害対策基本法の制定に先駆け、自治体として企業との公害防止協定の締結や独自の要綱・指針等による規制・指導を行うに至り、横浜市の公害防止に向けた徹底的な対策は、「公害対策よこはま方式」として全国に知られるようになるのである。

「環境行動都市」をかかげて

環境問題は現在、こうした、企業が加害者であり、市民が被害者であるという「成長・拡大期」のようなわかりやすい構図にはない。

環境問題は、一人ひとりの市民が、それぞれの暮らしのさまざまな局面で省資源・省エネルギー型の生活を実践しない限りは、決して解決することのない問題だ。市民一人ひとりの生活意識とライフスタイルの変革が不可欠な

のである。だからこそ横浜市は「G30」を目標に、市民の参画によって廃棄物の発生抑制や資源の分別と再利用を推し進め、また市職員が室内の冷暖房温度を28に設定する代わりに、「夏は夏らしく」とノーネクタイなどの軽装勤務を率先して実践し、自治体や市内企業に働きかけることで、国をも動かす、昨夏の「クールビズ」の全国的なムーブメントにつなげたのである。

横浜市があるべき都市像として掲げる「環境行動都市」とは、まず自らの暮らしのあり方や仕事のあり方を変えるための環境行動を、市民や企業、行政がそれぞれの日常の場で実践することによって達成されるものだ。

そしてその実践によって保全され、再生創造されるべき環境とは、市民生活のすぐ足元にある環境―すなわち、成長・拡大の時代に私たちが海岸線の埋め立てや丘陵部の宅地開発によって多くを失ってきた、横浜の丘陵線の緑であり、谷戸の田園風景であり、海の渚であるはずなのである。それらは、多摩・三浦丘陵や東京湾、そしてこの日本列島の大地と水と大気をつながりによって「地球環境」へと結びつくものである。

かつての根岸湾の渚と崖線に象徴される、この都市の生成の歴史を刻み、多様な市民の生活文化や生き物たちの賑わいの場としてある自然環境を、どのような形で守りよみがえらせることができるだろうか。この市民生活白書では考えてみたい。